

館・所名	自然史博物館	
	委員コメント総括	
<p>【シート1】 各館・所の運営状況（総括）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館友の会や博物館を拠点とする各種のサークルを核とし、それらを含む博物館支援NPOをもって博物館の応援団コミュニティを形成しているスタイルは特筆すべきものである。市民参加型の調査研究を通して市民とともに活動する博物館の姿は、全国の博物館の中でも独特の存在感を発揮しており、高く評価できる。 ・博物館の使命に掲げる「自然の情報拠点」としての役割は、博物館のHPをはじめ、オンライン上の様々な実験的情報発信や、友の会誌「Nature Study」など、様々な媒体を通じて効果的になされている。 ・外部資金の獲得による研究の推進と、「自然史博物館リポジトリ」などを通じて研究成果も積極的に公開されている。大阪市立自然史博物館の研究面の実績は、全国有数の実績をあげており、高く評価する。また、各種研究機関・自然関連団体・行政機関・企業との連携事業も活発である。 ・指定管理期間中の多岐にわたる目標をかなりの水準で達成していること、常設展、特別展ともに入館者が増加していることも評価できる。 ・職員総数が減っていることについて、とくに現場で支障が出ていないか、危惧される。日本の博物館界にとってモデルとなる実績をあげてきた大阪市立自然史博物館の基盤が崩壊しないように経営資源が確保されることを要望する。 	
	<p>「館の強み」の認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・公立自然史博物館の西の雄であることは自他ともに認めるところで、また西日本自然史博物館ネットワークの事務局として、様々な研修事業を支援していること、東日本大震災に際しては、標本レスキュー事業の牽引役となったことを高く評価する。組織として強固であることと、スタッフが自由度の高い活動をしていることが両立している点も高く評価できる。 ・学芸員によって日常的に標本や情報の収集が継続されているとともに、市民との共同調査や市民からの標本・情報提供も盛んで、絶えずコレクションの更新が行われている。これは博物館友の会、NPO、教員などからなる博物館の「応援団」の形成に成功していることの証で、こうした強力な支援組織をもつことは、他にはない強みといえる。また、強みに安住せず、日々新たな強みを構築している。 ・また、ICTを活用したリアルタイムな情報発信は、国内の博物館でもトップレベルで、オンライン上でも博物館コミュニティの形成に成功している。 ・隣接地に植物園があることは、自然史博物館にとって大きな強みのはずである。植物園は本来、自然史博物館と一体として管理、運営されるべき施設であると考え。市民の憩いの場としての機能に加え、Botanical Garden, Natural History Gardenとしての機能を備えるよう、関係機関と連携して、主導的役割を担ってほしい。
<p>【シート2】 各館・所の特徴</p>	<p>「館の弱み」の認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府下唯一の大規模自然史系博物館として、小規模な地方博物館とはちがったスタンスで、自然史の新しい研究成果を常設展示にとり入れる必要がある。本館施設の老朽化対策は喫緊の課題であるが、展示についても、現在の展示には欠けている分子生物学の成果を踏まえた進化理論や生物多様性、地球環境問題などについて、最新の知見をとり入れた展示に早急に更新することが必要である。 ・学校教育現場では、学習指導要領が改定され、教科書の内容も大きく変更されており、生物学が専門の教師にあっても、学び直しが必要な状況にあると言われている。大阪市の子どもの学習を支援する上からも、博物館の展示の早急なリニューアルが必要である。日本を支える科学技術を支える人材を育成する観点から、とりわけ生命科学の人材を多数育ててきた関西という地域性を考えても、予算を確保し、展示を更新することが急がれる。 ・全体の展示計画を詳細につめることは、それ自体に時間も経費もかかるので、とりあえずは新しい展示の基本構想の検討を始め、設置者だけでなく、広く市民に対してもアピールして、理解を求める必要があると考える。

<p>「環境 の変化」の 認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・経常経費における削減と競争的資金の比重の高まりは、博物館だけではなく、教育研究活動全般に及ぶ現象である。競争的資金を獲得できるように自然史博物館では引き続き努力することを期待しつつも、学芸員数の減少や普及事業の増加などによって学芸員が多忙を極め、潜在的な研究能力を十分発揮できない状況になりつつあることを危惧する。なお、競争的資金では措置されないものについては、施設設置者(大阪市)からの資金提供が必要である。 ・自然史博物館の特徴であるNPOや市民団体との連携を更に発展させ、年齢を問わず理科好きの人たちの居場所として期待に答えてほしい。
<p>指定管 理期間 の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指定管理者制度の実施にあたって採用された利用料金制度によって、博物館の運営の自由度が高まるとともに、セット料金の設定などによって観客サービスの向上が図られたことを評価する。 ・「きて！みて！感激！大化石展」のぞいてみようハチの世界」とともに、収蔵資料をふんだんに使った展示で、来館者の満足度は高く、業界内の評価も高い。ただし、もっと多くの人に見てもらいたい展示であったので、広報と集客には、更なる努力を期待したい。 ・職域を越えた内部評価と作業改善が行われたことを評価する。
<p>今後の 課題</p>	<p>・博物館はいうまでもなく、収集、展示、普及の3本柱で成り立っている。その場としての施設の老朽化対策は、人と収蔵資料の安全にかかわる基本的問題である。3本柱を担うのは、いうまでもなく人である。標本や資料を収集するのは学芸員だが、よい標本や資料は、何も無いところには集まらない。モノがモノを呼ぶのである。市民は、定評ある施設に標本や資料を安心して託すことができる。そうした面から自然史博物館に限らず、学芸員は定数を確保し、正職員として安定して当該施設収蔵品の管理にあたるようにすべきである。自然史博物館は博物館友の会や(特)大阪自然史センターと連携して、市民や学校への研究成果の普及に大きな成果をあげてきた。しかし、利用者ニーズの大きさに対して、こうした事業に携わる教育普及事業を担当するスタッフの数が、予算的な制約もあって、ごく少数に限られている。経験を積んだスタッフが次代を担う人たちに技術を伝承し、博物館学芸員を主とする研究スタッフの成果を市民に還元するためには、スタッフの拡充と待遇改善は欠かせない。</p>